

蛭子神社

ひるこ

館山市北条字角ノ坪一〇〇一番地



南町蛭子神社



新築なった山車格納庫



万里小路通房伯爵による扁額

- 例祭日 九月十四日
- 鳥居 神明鳥居
- 宮司 酒井昌義(鶴谷八幡宮宮司兼務)
- 氏子数 約五百戸
- 社紋 丸に蔓柏
- 境内坪数 七十一坪

祭神 蛭子大神(水蛭子)
事代主命(ことしろぬしのみこと)

由緒 遠く神代の昔、伊邪那岐命、伊邪那美命の夫婦神が天の真柱を建てて八尋殿にて新婚生活に入りました。最初に生まれたのが「水蛭子」。この子は不具にして「子」として認知されず、葦の葉舟に乗せられて海に流されてしまったのです。舟は黒潮に乗り

漂着したのが「蛭ヶ島」。やがて中世に至り「蛭子」を「エビス」と読むところから、もう一つの系統の「エビス」事代主命と共に七福神の恵比寿としてこの「蛭ヶ島」に勧請されました。

事代主命は大国主命(大黒様)の子で、エビスが豊漁即ち福をもたらすという漁業者の「エビス信仰」が七福神の「恵比寿信仰」へと発展し、更に商人達の絶大な信仰も相まって商売繁盛、漁業大漁、五穀豊穰、交通安全、家内安全などに御利益あらたかな南町の鎮守として崇敬されてきました。

やわねんまち出祭

南町は例年九月十四・十五日(現在は土旦)に執り行われる「やわねんまち(安房国司祭)」に出祭します。十四日の午前中には蛭子神社の例祭、夕刻には旧北条村社である北条神明神社例祭が行われます。北条神明神社へは北条の山車・御船が全て入祭して祭典が執り行われます。

南町の山車曳き廻しには、昔からの仕来りや、こだわりなどがいまでも数多く生きています。祭礼初日に行われる蛭子神社祭典で使われた神を、世話人が持ち小頭が先導して、山車正面左の柱にすえる仕来りがあります。お囃子では俗に砂切(車切)と呼ばれる朝一番に叩かれる「初めの太鼓」から一日の最後の締め叩かれる「終わりの太鼓」まで絶対に「太鼓を止めない」という仕来り。太鼓と笛に必ず「鉦(ちゃんちき)」を交えた五人囃子、ゆっくりと叩くさんざりにのせて野狐が化身したような南町独特の狐踊り、夜に町内に戻ってから叩く「かまくら」など、南町らしさがあふれています。

また年番の年に仕立てる「手古舞」では、北条他町は小学生の女子が務めるのが一般的ですが、南町では「手古舞」というよりは金棒曳露払い)として残り、基本的には三代在住の十五歳の長男の男子という仕来りが生きています。



神宿る白狐の舞

そして十五日の鶴谷八幡宮入祭の時、一の鳥居をくぐったところで皆で二升の酒を飲み干し、二の鳥居をくぐったところでさらに一升の酒を飲み干してから、山車を拝殿へつけるといふ伝統があります。また山車に乗っている子供たちへの配慮がされた山



昭和7年の年番南町山車と金棒曳き



鶴谷八幡宮で山車を迎える金棒曳き



鶴谷八幡宮入祭

車の曳き方がされており、子供たちを山車から降ろさずに鶴谷八幡宮への入祭が行われているのも南町らしいこだわりです。

祭礼前に行われる「花作り」では、和紙の四隅を朱に染め、日干し、二枚合わせで竹棒に貼り合わせます。その竹棒も自分たちで緑に染めたものという、多くの手間をかけた伝統の「花作り」が伝承されています。太鼓の練習では昔からの「囃子方制度」が残っており、さらに象徴

的なものに、提灯、襦袢、半纏は絶対に変えないという空気があります。

南町は、昔からの様々な仕来りと伝統を守り継承している町内です。



たくさんの子供達と町内曳き直し



昔から取り変えない半纏



提灯に火が灯る姿も美しい



夕日を浴びて八幡を後にする